

2015年7月9日

株式会社ホテルオークラ東京
代表取締役社長 池田正己 殿

DOCOMOMO Japan
代表 松隈 洋



ホテルオークラ東京本館の保存・再生要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的の一つとする、国際的な非政府組織 **DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement** : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

さて、御社におかれましては、東京都港区虎ノ門に所在するホテルオークラ東京本館を建て替える計画を進めておられるよし、新聞等の報道で聞き及んでおります。

本会はホテルオークラ東京本館を、20世紀の、とりわけ第二次大戦後のわが国を代表するホテル建築であると考え、注視してまいりました。以下に詳述いたしますように、ホテルオークラ東京本館は、傑出した「日本モダニズム」としての意匠を有する歴史的建造物として重要であるとともに、虎ノ門地区の景観を形成する枢要な要素であります。また、開館以来、今なお世界の著名人から称賛され続けていることから明らかなように、第一級のサービスに支えられた時間と空間を提供するホテルとして、日本が世界に誇るかけがえのない文化的資産であるといえます。

ぜひとも、ホテルオークラ東京本館の建替え計画をご再考いただきますよう、お願い申し上げます。

* * *

機能主義、合理主義、インターナショナルスタイルといった側面をもつモダニズム建築の中で、世界を見渡して「ここにしかない形」というものはそう多くはありませんが、ホテルオークラ東京本館はまさに「ここにしかない形」といえます。近年の超高層建築には無い、水平を強調したのびやかな外観、その水平線を作り出す庇は重なり合い、日本の集落の家並みをも連想させます。和風のモチーフを直接的に引用しつつ、庇は端部まで水平に保ち、柱とスパン窓によって、あくまで現代建築として完成させています。本館を象徴する空間として常に注目されている内部ロビーラウンジも、伝統的な意匠と技法を多用しつつも、「どの国の人々にも日本の美を伝えることができる明快さ」と「品格」とを両立させるために、華美になりすぎないぎりぎりのところで抑えています。高い天井、広々としたレイアウト、外光と照明のバランスが緻密に設計された、明るすぎず暗すぎない空間は、そこが東京の中心部であることを忘れさせ、どの国の人々にも快適さと落ちつきを感じさせてくれます。このように、国際的な空間でありながら、しかし厳然と日本であることによって、「もてなし」と「日本文化の誇り」の両方を、ここを訪れる人々に与えてきました。International—真の国際化とはこういうことだ、ということを示してくれる、未来に伝えるべき造形の規範であります。

この建物が、高い理念と第一線の建築家による共同設計、職人たちの手仕事の技の集積によって誕生したことは、御社もご存知のことと思います。しかしいかなる建物も、建築家の手を離れば、使う側の手に委ねられます。年を追うごとに増加する国際水準のホテルとの競争の中で、各時代に合った最高のサービスが提供できるよう、各部分に手を加えざるを得なかったことも存じております。しかしそのような状況下でも、外観を変えることなく、また谷口吉郎が精魂を傾けたメインロビーは、部分的には配置や形状を変えながらも、全体としては当初の雰囲気を持っています。いつもの場所で、変わらぬサービスが作り出す豊かな時間の流れに、今日も人々は癒され続けています。このようなホテルオークラ東京の代々の経営陣および従業員の方々のたゆまぬ努力に対しては、深く敬意を表する次第です。

このたび御社が進められております建替え計画では、本館は大きく形状を変えようとしています。それを「世界に誇るオークラのサービス」の舞台として、高層棟の中にどのように継承していくのか、オークラを愛して止まない世界中の人々が「大きな不安」と「動揺」を抱いています。そしてもし、そこに「いつもの、あのオークラ」が無かったら、決して癒されることの無い大きな喪失感が人々を覆い尽くすことでしょう。

ここには、ここにしか無い時間の流れがあります。そしてそれは、空間と一体不可分のものであります。現在、これだけの豊かな時間と空間を包含する施設がどれだけあるでしょうか。ホテルオークラ東京本館で醸成されてきた「時間と空間」は、もうここにしかありません。どうか、いま一度、ご再考くださいますよう、お願い申し上げます。

敬具